

書評

蔡涵墨

『历史的严妆—解读道学阴影下的南宋史学』¹⁾

里和麟太郎

本書は Charles Hartman 氏²⁾ の研究成果を中国語に訳したものである³⁾。本書は「序」, 「秦桧研究」, 「文本考古学」, 「道学与历史」と章が分かれ、最後に書評が一篇収録されている。以下、内容を紹介する。なお、章の区分を明示した上で、それぞれの論文ごとに紹介している。

・「秦桧研究」

内容紹介の前に秦檜について確認しておく。秦檜(1090~1155)は南宋初期の宰相であり、「専権宰相」と呼ばれる一人である。北宋滅亡に際して女真族王朝の金に拉致され、宋への帰国後に和平政策を主導し、宰相として長きに渡り権勢を誇ったとされる。

「一个邪恶形象的塑造：秦桧与道学」では、秦檜のイメージが形成されていく過程について注目している。秦檜時代において、朝廷の公式な歴史記録である起居注⁴⁾や時政記⁵⁾の編纂は正常に行われず、南宋の著名な学者である李心伝の著作である『建炎以来繫年要録』はこれらの記録を修正することを企図したものであった。この史料において秦檜に対する記述は中立的な立場からなされたと Hartman 氏は指摘している。しかし後世において編集された現行の版本においては『建炎以来繫年要録』成立以降に成立した道学者の手による書物の引用が存在し⁶⁾、後世において道学者の手により改変がなされ、秦檜のマイナスイメージ形成の中間段階となったと分析している。Hartman 氏が秦檜イメージの到達点とする『宋史』秦檜伝には、道学の影響が見受けられるが、このような道学的歴史観は朱熹に始まる。朱熹の父親や道学関係者の多くが秦檜と対立して政権を追われたことが原因となって、秦檜を南宋史上における負の側面として描いたことを指摘している。

「新近面世之秦桧碑记及其在宋代道学史中的意义」では、高宗御製の碑記に着目している。この碑は高宗が孔子と七十二子の賛文として書いた文章であり、最後の一卷の巻末が秦檜の手による。碑記の分析によれば、秦檜は自らを皇帝のパートナーとして文化の管理を行い、理想であった皇帝と宰相による共同統治を実現しようとしていたとしている。そして、碑文の中に「道統」という文字が使用されており、従来の南宋以降に使用され始め

たとする説とは異なり北宋末期には使われており、北宋から続く「帝系道統」と二程から始まる道統、士人がそれぞれの家で受け継ぐ私人の道統などが有り、朱熹は私人の道統を受け継ぎ「帝系道統」を修正したと指摘した⁷⁾。

・「文本考古学」⁸⁾

「『宋史・蔡京传』的文本史」では、『宋史』における北宋末の宰相蔡京の列伝に着目している。Hartman 氏は起居注などの原始史料から『宋史・蔡京伝』に至る過程を三段階に分け、原始史料を基にした『欽宗日曆』編纂までを第一段階、『欽宗日曆』では蔡京伝記を欠き、史料不足であったことから靖康年間の官僚であった孫覿による史料の提出によって完成した『欽宗実録』から『続資治通鑑長編』や『東都事略』の内容を含めた『四朝国史』が編纂されるまでを第二段階、『宋史・蔡京伝』編纂までを第三段階とした。Hartman 氏は第二段階で蔡京に北宋滅亡への責任を求める記述がなされるようになると指摘している。第三段階において『四朝国史』と『宋史・蔡京伝』の間には変化がみられ、道学の影響を受け、蔡京のマイナスイメージを高め、「奸臣」とみる記述がなされるようになると指摘している。要するに、蔡京を「奸臣」とみるイメージは『宋史』形成過程で次第に強化されていくと理解している。

「无奈的史家：孙覿，朱熹与北宋灭亡的历史」では、朱熹の北宋滅亡に対する歴史観に着目している。『欽宗実録』は前述の通り孫覿の記録提出によって完成した。しかし孫覿による史料は『四朝国史』や『宋史・蔡京伝』の中では主要な位置を占めてはいない。朱熹は孫覿を批判することによって、孫覿の記録を元にした『続資治通鑑長編』の権威を落とし、南宋最初の宰相李綱の北宋滅亡に対する責任を転嫁させることを図った。朱熹は北宋滅亡の歴史に対する道学的解釈を作ろうとしており、李綱を道学の道徳的模範としようとしていたと指摘する。司馬光、李熹、李心伝らは史料を用いて道徳的教訓を明らかにしようとしたが、朱熹はそれを批判し、歴史的教訓に基づき史料を利用して教育的な歴史記録を作ろうとしたことを指摘している。

・「道学与历史」

「论《续资治通鉴长编纪事本末》与十三世纪前期的史学编纂与出版」では、『続資治通鑑長編紀事本末』編纂に関わる道学の影響について言及している。この史料の編纂者は楊仲良とされる。いくつか存在する版本のうち、清代に商業出版された広雅本の巻首には盧陵本の序文として歐陽守道の序文が収録され、その文からは広雅本が盧陵本を基礎としていることや、元々存在した蜀本の存在が読み取れる。姚勉による序文では、楊仲良による蜀本は『本朝通鑑節要綱目』という名の書であり、その体裁は記事本末体⁹⁾と綱目体¹⁰⁾を結合させたものとなっ

ていたとみなされているが、道学者にとってこれは問題視され、四川から持ち出され後に廬陵で出版されることになった時に蜀本の体裁は改変されたと指摘している。

「陳均的『綱目』；十三世紀历史教材中的出版与政治」においては、三部作と称される綱目体書籍『皇朝編年綱目備要』、『中興兩朝編年綱目』、『統編兩朝綱目備要』の三つを通し、この時期の歴史、出版、政治の関係を探る。12世紀に編纂された大著である李心伝の『建炎以来繫年要録』、李燾の『統資治通鑑長編』は司馬光の『資治通鑑』に倣い編年体¹¹⁾を採用し、国家の記録の誤りや矛盾を正し、公正、公平に史料を評価した。しかし朱熹はそのような態度に不満を感じ、道徳的な価値判断を含んだ綱目体という新しい体裁を作り出した。朱熹が生み出した「教学型史学」は、最終的に司馬光や四川の学者達による「記録型史学」を駆逐したと指摘する。またHartman氏は『皇朝編年綱目備要』の現存版本の書名中に存在する空白部分に関して考証する。道学派官僚によって著者陳均による原題は変更され、陳均の意図と異なり『資治通鑑綱目』の後を受ける書物と位置付けられたことを指摘し、残り二つの史料についての分析を併せ三部作の版本からは13世紀における「記録型史学」から「教学型史学」への転換が見て取れると指摘した。

「『道命録』复原与李心伝的道学观」においても、道学と歴史記録との関係が取り上げられる。『道命録』は南宋の歴史家李心伝にとって最後の著作であるが、それより以前の著作と比べ差異があると指摘されてきた。Hartman氏はまず、『道命録』の伝世過程を分析し、現在見ることで『道命録』は李心伝の原稿から大幅な加筆がなされていると指摘する。そしてテキストの比較分析から、原本の形を割り出し、原本『道命録』において李心伝は広く程頤やその門生、朱熹の生涯などについて考証したことを明らかにする。また李心伝は専権宰相の弊害を強調しており、史嵩之専権の中で地位を獲得していった道学について批判的に見ていたと分析する。李心伝は四川の伝統史学の立場から道学的な歴史記録に対して否定的であり、福建学派¹²⁾による歴史修正を記録しようとしたと結論づけている。

・「书评」

「朱熹和他的世界；评《朱熹的历史世界》」は、余英時氏の著作『朱熹的历史世界』の書評である。『朱熹的历史世界』は序文の後、北宋の儒教復興運動とその朱熹に与えた影響について研究し、数編の論の中で宋代の政治文化概念に関わる内容について述べたことを指摘する。Hartman氏は提示した『朱熹的历史世界』のフレームが書中の重要なテーマと研究方法及びその双方の理解を助けるものとした上で、王安石と二程の思想の関係を述べたことは評価できるが、王安石に対する賞賛はポジティブな改革者としてのイメージの上立つ評価で

あること、また余英時氏は儒家思想を信奉する民衆群体が存在し、彼らは士人群体を信奉し、同時に統率されていたという一つの基本があることを信じているとHartman氏は指摘している。そして理想主義の「理学士大夫群体」と現実主義の「官僚群体」との対比はこれまでなされてきた「君子」「小人」という見方で士大夫を捉える伝統的な理解とは異なる「政治文化」の確立が想定しうることを指摘し、最後に、余英時氏が描き出した権力に挑む朱熹のイメージは、この本の読者たちに朱熹のような政治参加が、朱熹以後の時代においてはもはや不可能であると思わせたと言っている。この研究は中国史上で鍵となり、未来への分岐点であった宋代の特徴を捉えていると最後に指摘している。

以上が本書の内容である。本書に通底する論点は、朱熹から始まる道学的歴史観が存在し、元来存在した歴史記録を改変したという点である。道学的歴史観では道徳的教訓のもと歴史を記述した。そして、李心伝らの四川における歴史学と、朱熹やその門人による福建の歴史学の対立、そして福建史学による四川史学の駆逐が起こったことで、『宋史』における歴史記録は道学的な影響を色濃く受けた内容となった。そして、Hartman氏の論において重要となるのは「文本考古学」という方法論である。テキストの比較分析や『宋史』成立までの過程を分析することを通して、南宋の歴史記録における道学の影響を論じている。これらの指摘は、専権宰相という存在が一つの重要な位置を占めている南宋政治史上において重大な意義があると思われる。

最後に評者の意見を述べておく。

Hartman氏は『宋史』を蔡京や秦檜のイメージにとつて一つの完成形と指摘する。宋代以降、雜劇や小説の発達が起こり、岳飛と秦檜についての物語も形成されていく¹³⁾。劇や小説については筆記や伝承をもとに作られたと思われるが、これら民間に流布する物語としての歴史と朱熹の教育的な歴史記録の存在がどのような関係をもっていたのかという点について触れられていけば、南宋史のみならず以後の時代における歴史記録や伝承についての研究においても重要な指摘となったのではないかと考える。

それでもなお、総じて見れば本書は南宋における史料の特徴を新たに指摘し、記述の信用性への考証の余地を示し、かつ南宋人の歴史観について研究の可能性を提示した点で、意義は大きいものであろう。

注

1. 蔡涵墨『歴史的敵愾 解读道学阴影下的南宋史学』中華書局 2016年
2. アメリカ・ニューヨーク州立大学オールバニ校に在職。中国中世の文学、文化を専門とする。https://www.albany.edu/eas/hartman.shtml (2019年7月27日閲覧)

3. 本書は Hartman 氏の英文で発表された論文を、台湾清華大学や北京大学など台湾、中国大陸の大学における研究者が翻訳し、一冊の研究書としてまとめたものである。
4. 皇帝の側近が皇帝の起居を記録したもの。
5. 宰相が当時の情勢を記録したもの。
6. 『建炎以来繫年要録』においては本文と注釈部分が存在し、この注釈部分において『建炎以来繫年要録』成立後に完成したとみられる呂中『中興大事記』などの道学的な影響を受けた著作の引用があると Hartman 氏は指摘する。
7. 筆者によれば、「帝王道統」は北宋において使われるが、その「道統」は古代から受け継がれている帝王の学問の系譜である。対して「私人の道統」は朱熹やその他の道学家がその系譜を程頤など帝王ではない人物によって受け継がれる聖人の学問の系譜として置き換えたものである。
8. 筆者は『宋史・蔡京伝』を22の場面に分割し、『東都事略』の蔡京伝記と比較して共通している部分を「基礎文本」と呼び、二つの伝記の相違点について他史料との対照を行いながら考察している。この手法を「文本考古学」と呼称しているものと思われる。
9. 重要な歴史的イベントを選び、その一部始終を年代順に叙述する形式である。
10. 重要な事項を「綱」、付随する細項を「目」として記述する歴史書の形式である。
11. 年月を追って事実を叙述する史書の形式である。
12. 朱熹をはじめとした道学の学派は福建の出版業と結びつき自分たちの学問思想を広めたと筆者は指摘している。
13. 千田大介「岳飛故事の変遷をめぐって—鎮魂物語から英雄物語へ—」(『中国文学研究』第二十三期, 1997) 参照。